

平成28年度私立短大入試広報担当者研修会

報告書

平成28年11月

主催 一般財団法人私学研修福祉会
協力 日本私立短期大学協会

平成28年度私立短大入試広報担当者研修会

- 開催日程 平成28年6月29日(水)～7月1日(金)の3日間
- 開催場所 仙台ガーデンパレス(仙台市宮城野区榴岡4-1-5)
- 参加校数 81短期大学
- 参加者数 94名

報告書 CONTENTS

| | |
|--------|----|
| 開催の目的 | 1 |
| 研修内容 | 2 |
| 日程 | 3 |
| | |
| *講演 I | 4 |
| *講演 II | 8 |
| *事例報告 | 12 |
| *分科会報告 | 16 |

- ・参加短期大学一覧
- ・アンケート集計結果
- ・運営委員

開催の目的

『連携が短大を元気にする』

「連携」という言葉を『広辞苑』で調べてみると、「同じ目的を持つ者が互いに連絡をとり、協力し合って物事を行うこと」とあります。特に平成21年に告示された高等学校学習指導要領において、「大学などとの連携や交流を図る」と謳われて以来、就学過程の接続性を図り、進路探求の動機づけを促す高大連携事業が盛んに行なわれるようになり、「連携」という言葉そのものが、私たちが身を置く教育界にあっても日常的に話題に上がるようになりました。

高大連携事業の取り組みの一つとして、出張講義などは、近年では多くの大学で実施されています。しかし、連携事業の取り組みは、高校と大学との間だけにとどまっていっていいものだろうかという、地域連携や大学間連携などまだまだ検討の余地がありそうです。

そこで、今回の研修会では「連携」をキーワードに、まず全体会では、地域に密着した高等教育機関としての活動事例を「行政からの試み」、「短期大学からの試み」として、それぞれ紹介することにしました。

さらに分科会においては、入試広報の具体的な活動事例について議論を深め、その解決方法を見出す中で、他短大の教職員との連携、各短大内での教職員連携（協働）の重要性などを研修したいと思います。

高大連携にせよ、地域連携にせよ、「連携」の成果を勝ち取るためには、「信頼関係」を築き上げることが大切です。そのためには、相手のニーズをしっかりと聞き取ることが求められます。また、相手に訴えたい情報を正しく伝えることも重要です。

研修会に参加してくださる皆さまと連携しながら、地域コミュニティの基盤となる人材養成の場としての短期大学の活力を明日に向かって一層高めていきましょう。

研修内容

《第1日・6月29日》

■講演Ⅰ

1. 「みんなが創るまちなかの価値（新潟県長岡市）

— 誰もが楽しみ安心できる場所 誰もがつながり育てるまち —

長岡市 中心市街地整備室 まちなか政策担当課長 相田 和規氏

2. 「『まちなかキャンパス長岡』が目指すもの

— 地域の大学等とのコラボレーションを通して —

長岡市 まちなかキャンパス長岡室長・運営協議会事務局長 多田 博則氏

■講演Ⅱ

「いずみ絆プロジェクトから

杜の都・学都仙台における街興し—地域貢献による大学広報—

聖和学園短期大学 学長 鳴海 渉氏

■分科会研修

「連携が短大を元気にする」

■情報交換懇談会

《第2日・6月30日》

■事例報告

「新設短期大学の学生募集—開学から8年を振り返る—

仙台青葉学院短期大学 入試広報センター長 傳法谷 晃信氏

■全体会研修

「連携が短大を元気にする」

■分科会研修（前日の続き）

《第3日・7月1日》

■分科会研修／討議のまとめ

■全体会／分科会まとめの発表

研修会日程

第1日・6月29日(水)

| | |
|-------|-------------------|
| 12:00 | 受付 |
| 12:30 | 開会挨拶 オリエンテーション |
| 12:50 | 【全体会／講演Ⅰ】 |
| 14:20 | 休憩 |
| 14:30 | 【全体会／講演Ⅱ】 |
| 15:30 | 休憩・移動 |
| 16:00 | 【分科会研修】 |
| 17:30 | 休憩 |
| 18:00 | 【情報交換懇談会】 |
| 19:30 | |

第2日・6月30日(木)

| | |
|-------|--------------------|
| 9:00 | 【全体会／事例報告】 |
| 10:30 | 休憩 |
| 10:40 | 【全体会研修】 |
| 12:00 | 昼食・休憩 |
| 13:00 | 【分科会研修】 |
| 17:00 | 【情報交換会】 (参加は任意) |

第3日・7月1日(金)

| | |
|-------|---------------------|
| 9:00 | 【分科会研修】 |
| 10:30 | 休憩・移動 |
| 10:45 | 【全体会／ 分科会まとめの発表】 |
| 12:00 | 閉会挨拶 |

講演 I

1. 「みんなが創るまちなかの価値（新潟県長岡市）」

—誰もが楽しみ安心できる場所 誰もがつながり育てるまち—

長岡市 中心市街地整備室 まちなか政策担当課長 相田 和規氏

新潟県長岡市は、東京から上越新幹線を利用して、約1時間30分の距離にある。人口は約27万8千人（平成28年3月現在）。平成の合併がこの地方都市でも行われたが、平成16年に中越地震が発生し、そこで被災した市町村が大同団結して一つの市になったというのが現在の長岡市の特徴である。

長岡市の中心市街部は、信濃川を挟んで両側に位置している。大手デパート・スーパーなどの商業施設がJR長岡駅前から離れた対岸の信濃川左岸の郊外に立地していることもあり、中心市街地はどここの地方都市でも見られる衰退現象が起こった。長岡駅周辺や駅前の「大手通り」にあった主な地方百貨店・スーパーなどが、平成に入って連鎖的に閉店し、まちなかが空洞化した。



そこで、中心市街地を活性化させようと、長岡市役所を中心部に移転をさせるなどの、市街地開発事業を行った。この場所（JR長岡駅）は、昔、長岡城の本丸があったところで、今も昔も市民にとっては、“まちの顔”であり、“まちの中心”であるという意識が変わっていないこともあり、中心市街地に市役所を移転することについては、ほとんど市民の抵抗はなかったと思う。

まちなかに「住む人」を増やそう、「来る人」を増やそう、「働く人」を増やそう、という活性化の取組みが始まった。最初の取組みとしては、平成13年10月に「ながおか市民センター」をオープンさせ、大型商業店舗の後を市が全面的に借り受けて、「市民協働」のまちづくりのためのいろいろな実証実験を行った。ここでは、できるだけ市役所らしきというものを脱ぎ捨てて、自由で普段着で利用できる施設を無料で市民に開放。さまざまなイベントや活動の場を提供した。今振り返ると、商業施設が抜けたまちでどのように活性化しているかと考え、まちなかに公共的なサービスを持ち込んで、市民の方々がまちなかに来る、来ざるを得ないような環境を作ろうと、大きな政策を打ったように感じている。

平成18年3月には中心市街地における都市再生整備計画を策定し、郊外に分散した都市機能をまちなかに回帰させることと、防災性と利便性の高い中心市街地を創造することを目標に掲げ、JR長岡駅前の「大手通り」に、ここから2キロほど離れていた市役所を移転させ、市役所機能をあえてこの通り沿いに分散配置し、加えて、まちなかキャンパス、子育ての駅、ちびっこ広場などの公共施設を開設した。

平成24年4月にオープンした「アオーレ長岡」は、ガラス張りの屋根の下に大きな広場を設けた設計が特徴で、市民と市の連携・協働により、年間450を超える市民イベントが展開されている。まちなかに出てきてもらうのだからという市長の思いもあり、ほとんどの施設利用は無料で開放されている。漸く市民が集まってくる施設として、再認識されてきて

いる。運営には、NPO法人との連携・協働により、イベントのプロデュースから、設営・運営まですべて行っており、最近では行政の手を離れて、NPO法人が自立した形で行われている。

平成16年に発生した中越大震災の教訓を後世に伝え続けるため、「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」が建てられ、長岡の被災の状況がすべてまちなかでわかるという仕組みになっている。ここで被災に関する情報を入手し、中越地震の各被災地のメモリアルパークを巡る「中越メモリアル回廊」が整備されている。現在、公益社団法人中越防災安全推進機構がこの施設を運営しているが、最初のきっかけは、中越地震によって被災した住民が、まずはボランティアとして集まった。それがNPO法人になって、さらに公益社団法人になった。市民の方々が協力し、さらに市もそれを支援し、これまでの組織に成長したと思う。その後、東日本大震災や熊本地震が発生したが、その際は、すぐにこの機構が動き、現地に職員を派遣。さらにボランティアを募って今日でも派遣を続けている。また、日常的には市民に対して、防災学習を基本とした教育の場を提供している。中越市民防災安全大学では、安全や防災をテーマに専門的な知識や災害時に役立つノウハウや実技を学び、卒業すると『中越市民防災安全士』の認定証が交付される。地域の防災活動や災害時に活躍できる人材、災害や防災の知識・教訓等を語り継げる人材を育成している。

また、子育てに関しては、ファミリー・サポートセンターを設置し、子どもや母親の遊ぶ場を提供している。子育ての支援を受けたい人と援助を行いたい人が登録をし、さまざまな育児の手助けをする事業で、子育てに対する悩みや意見を吸上げ、施設の運営に反映させている。さらに、多世代健康まちづくりの拠点として、健康の3要素である『食・運動・休養』を良質でバランスよく実践できる、株式会社タニタがプロデュースした『タニタ・カフェ』をオープンさせた。平日には主婦層、休日にはファミリー層が多く利用している。

現在、福祉の拠点として、「絆をつなぐ 世代をつなぐ 福祉拠点の形成」をコンセプトとした新・社会福祉センターを建設する予定となっている。社会福祉協議会とボランティアが連携して、安心して寄り添える場所、さらに社会福祉協議会の拠点にしようということである。民間企業に投げかけたところ、是非とも介護付き老人ホームを開設したいという話があり、一般の分譲マンションと併せて、高齢者に住む場所が提供される予定である。

今回の研修テーマは「連携」と伺っている。これとセットでもう一つ提案したいのは「協働」ということもテーマではないかと思っている。「協働」は恐らく「連携」よりももう少し広い概念であって、大学・企業・行政機関など様々なセクターが、それぞれやれることは全て持ち寄って、目的に沿って、協議・協力し、さらにそれを形にしようと実行に移すという進めていくことが重要ではないかと思っている。行政側にいると、いろいろな限界を感じる。各セクターも同じだと思う。何かの壁にぶつかったときに、お互いにできることを持ち寄る。そのように「協働」をしていくことで、ものごとは少しずつ進んでいくのではないだろうか。

2. 「まちなかキャンパス長岡」が目指すもの —地域の大学等とのコラボレーションを通して—

まちなかキャンパス長岡室長・運営協議会事務局長 多田博則氏

平成18年3月に中心市街地における都市再生整備計画を策定し、その施策の一つとしてまちなかに「学び」と「交流」をキーワードにした交流拠点施設の整備を図ることを目指し、平成23年9月に「まちなかキャンパス長岡」がオープンした。

キャッチフレーズは、「きになることがここにある」で、ロゴマークは、「学び」「交流」「伝統」の3つの要素を「米百俵の精神」から、米俵の重なりを見立てて表現している。

長岡市に所在する高等教育機関である、長岡技術科学大学、長岡造形大学、長岡大学、長岡工業高等専門学校の3大学1高専がそれぞれの専門性を活かした講座を開催するほか、「まちなかカフェ」や「まちなか大学」などの各講座は、これらの高等教育機関及び市民、長岡市からなる「まちなかキャンパス長岡運営協議会」で企画・運営している。



主な事業は、会議室、多目的スペース、スタジオ、創作交流室などの施設の貸出や多様化、高度化する学びのニーズや学びのステージに応じた様々な講座の開催などである。講座等の企画・運営・開催には、多くのボランティアスタッフが携わっている。

「まちなかキャンパス長岡」は「まちキャン」の愛称で親しまれているが、講座には、①オープンスペースなどで開催し、コーヒーを飲みながら、気軽に受講でき、少人数なので講師とのコミュニケーションがとれるのが魅力的な「まちなかカフェ」、②関心のある分野をじっくり学ぶことができる連続講座の「まちなか大学」は、ひとづくり学科、ものづくり学科、まちづくり学科からなり、受講生には『学生証』が発行され、まちキャンを応援する約100の店舗にてサービスが受けられる。③「まちなか大学院」は、調査やディスカッションなど実践を重視したカリキュラムで、自らテーマをもち、主体的に学ぶ。④「こども講座」は、夏休みを中心に、こどもカフェ（1回講座）、こども大学（3回連続講座）から構成されている。⑤「市民プロデュース講座」は、講座にチャレンジした市民とまちキャンが協力して開催するもので、市民の知識や技術を活かしたユニークでアイデア満載のものばかりで、年間10講座開催されている。⑥「まちキャンボランティア企画講座」は、まちキャンを支えるボランティアスタッフが企画・運営するもので、どれも個性的な講座となっている。⑦「企業・団体プロデュース寄附講座」は、企業、団体が得意とする分野の講座で、⑧「出張まちなかカフェ講座」は、合併地域でまちなかカフェを開催し、支所地域へ学びを波及させている。⑨「米百俵塾」は小林虎三郎をはじめとした郷土の先人たちの生き方や考え方・哲学を学び、現在の生活や地域社会の中で活かす方法を考えるもので、現地見学やワークショップも実施している。

その他には、学びの成果を活かし、身近な地域課題解決策を創り出す市民協働プロジェクト

トである「まちづくり市民研究所」は、1年間かけて調査・研究し、その成果を市に報告する。また、まちキャンに足を運べない人のために外部団体と連携することにより「分校」として、講師の紹介をはじめ、さまざまな面で協力しながら講座を開設する事業を展開している。

まちなかキャンパス長岡運営協議会には、3大学1高専の学生も委員として参画し、講座の開催や広報誌の発行、イベントの開催など、自主的に、主体となって事業を実施している。

最後に、「まちなかキャンパス長岡」は、「米百俵の精神」を基本としながら、独自性を持った学びを実践するとともに、人と人とが出会い、ふれあい、学びあう場として、「学び」と「交流」の拠点であり、だれでも気軽に受講でき、自由に学べる「みんなのための大学」として、市民協働の担い手となる人材の育成を目指している。

その後行われた質疑応答において、参加者から、「まちなかキャンパス長岡」が開設している各種講座には、3大学1高専など、多くの教職員や、講師としてさまざまな方がかかわっておられるとのことであるが、その運営のための経費はどのように賄っているのかとの質問が寄せられた。

多田氏からは、「まちなかキャンパス長岡」の予算は、基本的には、各高等教育機関の負担金、長岡市の負担金、そして受益者負担の考え方から、市民である受講者からの受講料によって賄われている。大学にとってみれば、負担金がある、講師などの人手も提供するというのはどうなのかと思われるかもしれないが、自分たちが講座を運営しているという意識が非常に高い。受講者である市民にとっても、大学の先生との距離間が近くなり、また大学側にとっても、自大学の教育、研究内容を理解してもらえるいい機会であるという意識を持っている。市民との協働により、お互いを身近な存在に感じられる場であると思っている、とのことであった。



講演Ⅱ

「いずみ絆プロジェクトから

杜の都・学都仙台における街興し—地域貢献による大学広報—」

聖和学園短期大学 学長 鳴海 渉 氏

始めに鳴海学長が携わってこられたこれまでの経歴や仙台市とのかかわりについて触れられた。

泉市役所に採用され後、仙台市との合併により仙台市役所に勤務し、35年間20か所ほどの部署で市政に携わってきた。特に、中心市街地活性化法が施行されたときには、経済局に在職し商工振興を担当していたことから、仙台市の街をどのように再構築していくのかという議論の中心で仕事をされていた。当時は、市の中心部から大学がどんどん郊外に移っていき、一番町などの繁華街から学生の姿が少なくなり、街を活性化するにはどのような方策を講じたらよいのか。と同時に一番町などと駅周辺をどのように一体的に開発していくのかという議論を行っていた。現在、仙台市地下鉄東西線の完成に合わせて仙台駅舎をリ・ニューアル、完成して1ヵ月ほど経つが、引き続き仙台駅周辺には更にホテルやホール、事務棟などが建設され、仙台市の中心部が再形成されてきているなどその当時の論議に基づいた計画が実現しようとしている。

後年、泉区の副区長時代には泉副都心の再構築に携わり、2年後に健康福祉局次長として、介護保険法の改正、障害者自立支援法、後期高齢者保健の立ち上げ、待機児童で保育所の増設や民間への移行、市立病院の太白区への移転など医療・福祉関係の業務を取り扱ったのち、太白区長へ異動し、太白区の副都心づくり「あすと長町」への各種商業施設の誘致、市立病院の移転の実現に邁進したが平成21年に定年退職。同年に聖和学園に勤務、副学長を経て平成25年から学長に就かれている。そのような経験の中で、行政と大学をどのように結び付けていけばよいかを考えられた。



○人口急増の背景

現在、聖和学園短期大学は、仙台市の市街地の中でも一番西北に位置し、仙台市泉区に所在している。泉区的位置関係を確認しながら、その町の歴史、風景を紹介された。西暦700年頃に建立されたお寺が焼失し、その後再建されて江戸時代には宿場町としてにぎわい、昭和30年ころの茅葺屋根の住居や旅籠の様子から、昔の営みが偲ばれる、非常に懐かしい宿場町風景であった。昭和48年当時の泉市は、市とは名ばかりの寒村であったが、仙台市のベッドタウンとして急速に発展し、日本で第2位の人口急増都市になった。中心部がない街であったが、27の団地が計画され、最終人口は27万人の計画人口とされ実際にその数値に近い人口増になるものとされているが、同時に少子高齢化と言う新たな問題も生じてきているが、今新たな団地開発が進んでおり将来的にも当初の予想通りの人口に達するものと見ている。本日この講演に先立って行われた長岡市の例とは逆で、中心部に役所などの機能を集約したのではなく、逆に田んぼや畑を土地区画整理に基づいて101haに及ぶ新市街地を形成。更に隣接地に23haのベガルタ仙台の本拠地となるサッカースタジアムや体育館、野球場、テニスコートなどを配し



た七北田公園を加え新たな街を作り、都市化をしようという逆のパターンをとっている。しかし、この市役所を移転して、新たな街をつくろうという計画に対しては、地権者等の大反対があったが、将来を考え反対する方々への説明会を繰り返し、新市街地としての形を形成することが出来た。

昭和 44 年当時、仙台市の人口は東北の中心都市として急激に増え続け 56 万人に達していた。このことから更に都市機能を充実させるべく政令指定都市を目指し仙塩合併を行おうとしたが一夜にして合併は延期となり政令指定都市に昇格することはできなかった。その後昭和 50 年代には仙台市の人口が 70 万人を超えた頃には都市機能を十分に機能することが難しくなり、隣接市町村へ特に北部の泉市への仙台から移動が激しくなり、泉市と一体になることによって 100 万人規模の都市が見込めるとして、昭和 63 年に仙台市、泉市、宮城町、秋保町の 2 市 2 町で対等合併を行い、宮城県の本真中の 3 分の 1 が仙台市という規模になった。その後、平成元年 4 月に仙台市の政令指定都市移行が認められたことにより泉市はその区域そのまま泉区となった。

昭和 48 年から 15 年間で公共施設や道路の殆どが泉市の時に整備されたが、交通網の要として、唯一なかったものは地下鉄であった。今では泉区の中心部から仙台駅まで、地下鉄で 15 分の距離にあるが、当時はバスで 1 時間から 1 時間 30 分かかる不便さがあった。泉市に転入して来た住民は、殆どが関東や関西からまた、仙台市から移ってきた方々が多く、泉市は東北で一番高額所得者が住む町だった。それは家を建てないと移り住むことはできなかったからである。従って、団地造成に合わせて小・中・高校、児童館、保育所も団地造成時に計画的に用地を無償提供されたことにより、団地内には公共施設が全てそろっていた。今では考えられないが、一年間に 4 校の小中学校が同時に開校することもあった。当時 10 万人にも満たない市では考えられないような状況であった。合併の時の協定で、泉中央駅の一つ手前の八乙女駅までは地下鉄がきていたことから、合併によって泉中央地区まで地下鉄を延伸することとなり、平成元年に工事を着工し、平成 4 年 7 月に泉中央駅が完成した。この地下鉄・泉中央駅の建設をはじめ、都市公園、大型商業施設や地下鉄駅に隣接して大型駐車場の設置、図書館、ベガルタ仙台のホームサッカー場、テニスコート、ホール付体育館などが次々と建設され、現在の泉中央（写真右）がある。



現在は、泉中央地区はマンション建設や大型商業施設のリ・ニューアールはじめペデストリアンデッキ下の駐輪場を市民利用施設に改装するため工事を行っている最中である。このような状況にあつて、人口がどんどん増えると同時に一方では高齢化率も増加してきている。平成 23 年には東日本大震災を経験するが、宮城県北部工業団地にトヨタ自動車東日本本社が移転して来たことなどもあり、工場や研究所等も多く移ってきており、泉区の人口はそれでもさらに増加傾向にある。

○「いずみ絆プロジェクト」協定締結（平成 23 年 11 月）・活動状況



都市化が進む泉市に呼応するかのようには大学、短大等が移転してきた。現在、仙台市内には 12 大学があるが、そのうち泉区内には 6 大学・短期大学があり、学都仙台の重要な一翼を担っている。この特色を活かし、大学をまちづくりのパートナーとして、大学の知的資源や若者独自の発想と行動力を活用したまちづくりを積極的に進めていくため、地元の 6 大学と泉区まちづくり推進協議会、仙台市泉区で、「仙台市泉区における大学と地域との連携協力に関する協定」を締結（写真上）し、この協定の推

進組織である「泉・大学地域ネットワーク」により、様々な地域連携協力活動に取り組んでいる。聖和学園短期大学では、毎年3つ程度のプロジェクトを実施するよう計画をたてているが、泉区まちづくり推進協議会は毎年、そのプロジェクト内容について審査が行ない、優秀な提案をなされたプロジェクトに発表の場と助成をしている。このプロジェクトは地域住民からは非常に大きな反響がある。少子高齢化が進む中であって、高齢者と一緒にビーズを使ってアクセサリーをつくったり、一緒にダンスをしたり、お祭りへの参加、高齢者リメイクファッション、カラオケ大会、介護活動など、様々な取組みを行っている。今朝も「いずみ絆プロジェクト」の一環として、参議院選挙の投票の呼びかけをしている6大学の学生とともに広報活動を行ってきたところである。



いずみ絆プロジェクト-介護



将監様まつり



南中山市長センター祭り-ハンドメイド同好会

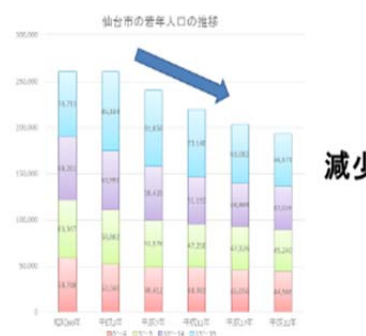
○建学の精神

聖和学園短期大学は仏教主義の大学であるが、特定の宗派はない。このような地域貢献活動にも積極的に関わってきた。地元で育ててもらったことを地元に戻すという思いが建学の精神である『「慈悲」と「和」、「智慧」を学ぶ』に繋がっている。



○若者の町から高齢化社会へ

高齢化の波が押し寄せ、少子化の波も同時に押し寄せている現在、泉区は若者の町だといっていたが、年々若年人口が減少してきている。それは、これまで全国的に言われていた減少の波を見て小学校、中学校、高校、大学の順番で減ってくるのかと思っていたが、現状では同時に減ってきている。このことを念頭において見直しを行っていかねばいけないと思っている。仙台市内の大学等に通う学生の状況をみると、四年制大学や専門学校はわずかではあるが減少している。一方、短期大学は増加傾向にあることから、減少した専門学校への志願者が短期大学へと向いているのではないかとと思われるが、専門学校の数も増えていることなどから専門学校の定員割れも進んでいるのではないかと推測される。





町の中から若者がいなくなると、町は寂れてしまう。だから県内で若者が動きやすい環境を整えていく必要があると考え、「市バス」や「市営地下鉄南北・東西線」で通学する学生・生徒・児童等を対象に、仙台市交通局は全線で乗り降り自由な「学都仙台 市バス・地下鉄フリーパス」2種類の低額な均一乗車定期券を発行している。これを全県に広げれば、もっと活発に若者が動きまわり、活動が広がると考えるし、少子化対策にもなるのではないだろうか。全国の大学・短大の高等教育機関が手を取り合って地域に貢献する大学として現状を積極的に打開していく必要がある。

○地域貢献による大学広報について

今、短大にとって、新たな高等教育機関の制度化として、「専門職業大学」、「専門職業短期大学」の創設が関心事の一つである。平成31年度には開学予定となっているが、まだまだその全貌が見えない部分が沢山ある。現行の大学、短期大学と専門職業大学等と何が違うのかと考えた時、教養教育の重要性と地域に密着した取組みが我われ短大との大きな違いであり、強みである。これこそが我われの生き延びる道ではないかと考える。広告の媒体として、テレビCM、ダイレクトメール、新聞広告、電車内広告等があげられるが、これから先、少子化に伴う定員割れなどによって大学の広報・宣伝に予算を割けない状況になったとき、どうすればいいかと考えると、広報の最大の手段は、やはり口コミではないだろうか。そのカギとなっているのが地域貢献につながっている。手軽に発信できるホームページなどを利用して、地道に発信し続け、地道に地域貢献活動を繰り返していくことではないだろうか。

聖和学園短期大学では、週1~2回の頻度で各種行事やイベントをこまめにHPで紹介している。自前の広報媒体で、地域で活躍する学生の様子や公開講座情報、イベント情報をリアルタイムとまではいかないが、できるだけありのまま、こまめに伝えることが必要であると考えている。地域に密着した大学、それが短大であり、短大にしかできないものとする。是非、広報担当者の皆さんが知恵を寄せ合って、様々な広報媒体を使い、短大が楽しく地域に貢献し、元気に活躍している姿を在学生や高校生、保護者の方々、一般の方々にアピールしていただきたい、とのメッセージを寄せられた。



事例報告

「新設短期大学の学生募集 ー開学から8年を振り返るー」

仙台青葉学院短期大学 入試広報センター長 傳法谷 晃 信 氏

○学校法人北杜学園について

仙台青葉学院短期大学は、開学から8年目を迎える短期大学である。もともと学校法人北杜学園では専門学校が設置されており、平成21年に仙台青葉学院短期大学が開学するまでの約20年間は、専門学校における学生募集に携わってきた。現在、宮城県内に短期大学は4校、東北6県で27校設置されている。一方専門学校は、県内だけでも59校、東北6県では198校設置されていることから、非常に厳しい環境の中で学生募集を行ってきた。そこで培ったノウハウが、今の短大の学生募集にも活かされていると思っている。



学校法人北杜学園は、昭和55年に仙台スクールオブビジネス（現・仙台医療福祉専門学校）を創立し、翌年、宮城県より学校法人格の取得及び専修学校の認可を受けた。昭和61年に学校法人大原学園と提携し、現・仙台大原簿記情報公務員専門学校を開校。その後、平成元年から平成13年までの間、厚生労働大臣より、介護福祉士養成施設、社会福祉主事養成機関、理学療法士、作業療法士養成施設、言語聴覚士養成所等の指定を受けるなどして、平成8年に仙台医療技術専門学校を開校し、平成13年には、東北初の4年制大学卒業生対象の言語聴覚学科を設置した。平成20年に学校法人日本建設学園と合併し、現・仙台工科専門学校を、さらに平成22年には宗教法人陸奥国分寺より仙台デザイン専門学校の運営を引き継ぎ、設置校に加えた。その間新たな高等教育機関として、平成21年に仙台青葉学院短期大学が開学した。

北杜学園グループとしては、2つ保育園と1つの認定こども園を運営する社会福祉法人北杜福祉会と3つの株式会社（学園ファシリティーズ、教育計画、数理計画）がある。中でも株式会社学園ファシリティーズは、学生寮管理、アパート、マンションなどの斡旋業務などを行っており、入試広報センターとは密に連携している。仙台は東北地方で最大の都市であるため、宮城県を除く東北5県からの高校生にとって、非常に求心力がある。オープンキャンパスでは、学園ファシリティーズの専用ブースを設け、住まいの相談に対応している。今年度からは県外出身者の仙台での一人暮らしに対する支援を強化すべく、予約制で学生寮、アパートを見学するツアーをオープンキャンパスの企画として新たに盛り込んだ。

平成28年度の在籍学生数（平成28年5月1日現在）は、短期大学1,569名（男子282名、女子1,287名）であり、同法人の専門学校と合わせると、北杜学園全体では、3,578名（男子1,276名、女子2,302名）になる。

○学生募集媒体の変遷

今回この研修に参加されている方の中には、広報担当者として1～2年目の方もいらっしゃると思われることから、学生募集媒体がどのような変遷をたどって来たか参考までにお話しします。今ではインターネットがこれだけ普及し、各大学においてもホームページを開設して、様々な情報を発信することができるが、昭和45年当時に創刊されたリクルート進学ブックなどを見てもわかるように、当時の高校生が大学や短大の情報を得ていたのは、紙媒体であり、白黒印刷だった。その後、カラー化され、よりコンパクトになっていった。

○仙台青葉学院短期大学について

仙台青葉学院短期大学は、平成21年に開学したが、4年制大学ではなく短期大学設置に至った理由は、東北地方の所得水準は全国的に見るとまだまだ低い水準にあることから、4年制大学よりも、就学期間が短い高等教育機関に対してのニーズが高い。また、国家資格を取得できる高等教育機関が東北にはあまり設置されていなかったことも短期大学を開学した理由の一つである。開学当初は、キャリアデザイン学科（現・ビジネスキャリア学科）と看護学科の2学科が設置された。その4年後から、同法人の専門学校からの改組を行うなどして、学科の増設を積極的に行い、現在、7学科を擁するまでに至った。毎年のように学科の新増設を行い、他学より少しでも早くその専攻分野に進出することで、例えば、“看護師になるのだったら仙台青葉学院、”といったイメージをもってもらうことが大切だと考えた。また、毎年、学科の新設を行っている、そのたびに学校の知名度が上がり、大学自体に勢いがあると思われるようになり、高校訪問時の話題となった。

キャンパスは3つあり、五橋キャンパスにはビジネスキャリア学科、看護学科、こども学科の3学科、長町キャンパスにはリハビリテーション学科、中央キャンパスには歯科衛生学科、栄養学科、観光ビジネス学科がそれぞれ設置されている。

学生募集において、本学園が重要視していることは、まず教育力、そしてスピード感、立地条件である。立地がいいということは、学生の通学に便利だということだけではなく、アルバイトをする学生にとっても大きなメリットである。

平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、宮城県内の大学、短期大学のほとんどが、卒業式中止、入学式中止、高校においても4月いっぱい臨時休校という状況になった。専門学校から異動し、4月から短期大学の広報活動、学生募集に携わる予定であったが、約1ヵ月間は広報活動が何もできない状況であった。唯一4月に開催されたのは秋田県で4月23日に開催された会場ガイダンスが最初であった。宮城、岩手、福島では5月の後半になってから、ようやくガイダンスや高校訪問が出来るようになった状況であった。

震災後、平成25年にリハビリテーション学科、こども学科を新設したが、ビジネスキャリア学科、看護学科の志願者も若干増えたこともあり、この年、リクルート進学総研発行の入試実態調査全国私立短期大学の志願者ランキング上位20校のうち14位になり、その後も学科の新設があり、志願者数も順調に伸び、2014年度には全国で8位、翌年6位までになった。その実態調査において、6位になったことは非常に嬉しかったが、その翌年度は志願者数を減らす結果となり、今年度は巻き返しを図るため教職員と一丸となって取り組んでいるところである。

本学では、毎年4月1日に次年度向けのパンフレット一式を完成させている。4月の高校訪問において、翌年度のものを直接、先生方に提示できることに加え、ガイダンス等で面談する高校生に対しても今必要とする情報を伝えることができる。競合する大学等と比較するうえで、一早くその情報を提供することは、高校生にとってみれば、それだけ早く進路決定の参考になるということに繋がることから、学生募集上も大きなメリットになっていると考えている。

○高校訪問について

新設短期大学が学生募集をするためには、いかに大学名を覚えてもらうかが重要であり、平成21年当初は、短期大学名より姉妹校の専門学校のイメージがつよく、圧倒的にその知名度が高かったが、平成23年度からは年間3回の高校訪問を実施したことで、宮城県内では仙台青葉学院短期大学の名は殆どの高校で知られるようになっていった。

○オープンキャンパスについて

本学では、キャンパスが3カ所に分かれていることから、キャンパスごとにオープンキャンパスを実施し、合わせて20回開催している。宮城県では、私立大学・短期大学入試広報担当者協議会が年に1回開催されている。そこでは前年度の入試結果、新年度の入試内容の変更点、オープンキャンパスの日程を発表する。本学のオープンキャンパスの日程を発表すると、その多さに例年各大学・短期大学の担当者から驚かされている。キャンパスが分かれていることから、このくらいの回数を実施することとなり、今年度も6月末までにすでに5回開催している。

オープンキャンパスでは1回しか参加出来ない高校生もいることから、その1回で満足してもらえるよう、模擬授業を担当する教員も厳選している。また、専門職系分野の学科が多い事もあり、模擬授業よりも体験を通して学科や職業の理解を深めてもらう方が高校生にとっては満足度が上がるのではないかと考え、模擬授業よりも体験をメインにしている学科も複数ある。

オープンキャンパスでは、冷・温機能のあるタンブラーを記念品として配っているが、参加者には大変好評である。当日の流れの中で、まず参加者は受付を行った後で、記念品と飲み物を渡し、各学科の会場に案内するが、オープンキャンパス参加者に最初にインパクトを与えることで、その後のオープンキャンパスへも期待感を持たせることが出来ていると感じている。



○学費支援制度について

最初にもお話しした通り、東北地方は経済状況が厳しい家庭も少なくないことから、ガイダンス等では、高校生のみならず、保護者の方からの奨学金に関する問合せが非常に多くなっている。そういった方々に対して、北杜学園では様々な学費支援制度を用意している。まず北杜学園奨学金制度として給付型の奨学金を用意している。また、納付金の納入方法についても、通常1年次には入学金、前期授業料、後期授業料の3回、2年次では前期授業料、後期授業料の2回の分割となるが、学科によっては各回の納付金が多いことから、希望者には①各月均等払い、②ボーナス併用分割払い、③ボーナス一括2回払いの3通りの中から選べる納付金延納制度も用意している。各学年完納タイプと卒業後延納タイプの2種類があり、卒業後延納タイプは3年課程の学科で利用することができ、納入期間が修業年限を含め2倍の期間で納入できる内容となっておる。この制度を利用する際に高校生・保護者にアドバイスしていることは、日本学生支援機構の奨学金と併用することにより、日本学生支援機構から振り込まれた奨学金をそのまま学費引き落とし口座に入金させることによって、在学期間中は家庭からは納付金への納入を0にすることも可能であるという事を説明している。

このほかにも学科によって、特待生制度、資格取得奨学金制度、授業料減免制度などの学費支援制度が用意されている。

終わりにあたって、本学では、このような形で入試広報活動を行ってきたが、まだまだ弱い点もあり、特にインターネットによる広報は十分とは言えない。本日の研修に参加されている、短期大学も含め、先進的な取り組みを行っている大学・専門学校の例を参考に、本学においてもその部分を強化していきたい。今後2018年問題や新たな学校種の創設など、短期大学を取り巻く環境はますます厳しくなってくるが、短期大学には短期大学の良さがあると考えているので、今後も頑張って学生募集をしていきたいと思っている。

その後、以下の質疑応答が行われた。

Question : 学費支援制度の中で、納付金分納制度について説明があったが、納入期間は修業年限を含め約2倍の期間となると、卒業後も支払うことになるが、卒業後に支払えない場合には、未収金となってしまふ。その率とその未収金を防ぐために何らかの保証制度を講じているのか。

Answer : 奨学金制度については法人が管理しているので、申し訳ないが詳細については把握できていない。ただ卒業後延納タイプを利用する場合、連帯保証人の他に、4つの条件を満たす第三者保証人を必要としている。この制度を設けたことで以前よりは学費未納者の数が減ったとのことである。

Question : こども学科等の幼・保系の分野においては、専門学校と競合する面があると思うが、どのようなことに注意して広報を行っているか。

Answer : 専門学校の関係者は、ガイダンス等において短大と同様の資格・免許を取得できるメリットを強調しているが、取得方法等についてまでの説明はしていない様である。短期大学で取得するメリットや、「短期大学士」の学位が取得できることなど、小さなことでもひとつひとつ説明をしている。高校生にしてみれば、面接だけで合格できる手軽さから、そのようなことは深く考えず専門学校を志望する高校生も見受けられる。専門学校とは違う短期大学の良さを地道に丁寧に説明するように心がけて接している。

Question : オープンキャンパスについて、より具体的な運営方法について教えて欲しい。

Answer : 今までは午前、午後に分けて実施していたが、今年度から見直しを行い、約2時間半参加することで、すべてのチャンネルに参加できるという仕組みにした。10時スタートだが、例えば11時にきても、2時間半いればすべてが見られるようなチャンネル構成にしている。学生主体か教職員主体かといえ、こども学科は半々である。インパクトのある教員もいるので、その教員による模擬授業を行い、学生も体験コーナー等で参加者とのコミュニケーションを一生懸命とって来ており、教員と学生が協働して実施している。遅れてきた高校生には、途中から入るのではなく、次のチャンネルが始まるまで教職員や学生による個別相談のブースを設けて、そこで時間の調整ができるよう工夫している。

第1分科会 研修報告

担当：広島文化学園短期大学 松元 健治 委員
育英短期大学 桂 健太郎 委員

【 分科会の目標設定 】

第1分科会は、短大プロパーのみ16名(委員含む)のメンバー構成でした。参加者が教員や職員であることや、入試広報担当者としての経験年数に差があることなどを考慮して、始めに研修会の目標について意識統一を図りました。

研修会全体の中での学びや情報交換をもとにした自大学の諸問題に関連する討議と、「連携」をキーワードに行う「短大を元気にするため」のグループワークを通して、入試広報担当者としての個々の力量を高め、短期大学の振興にむけて参加者相互の連携を深めることを、分科会の主たる目標として設定しました。

【 分科会でのスケジュール 】

分科会1日目

- 1) 名刺交換、運営委員挨拶
 - 2) 事前に作成した「自己紹介書&大学自慢」を基に自己紹介
割り当て時間を一人2分間として、要点をまとめて発表するよう指導した。
 - 3) 分科会の目標設定、分科会の進め方の説明
 - 4) 研修会申し込み時のアンケートの内容について情報交換
アンケート提案の趣旨説明、各大学の事例発表、質疑応答という形で展開した。
- ◆情報交換の内容
- ①オープンキャンパスの運営の在り方
 - ②SNSの活用方法
 - ③短期大学の特色ある連携事例

分科会2日目

- 1) 全体会の振り返りと気づきの共有
講演Ⅰ・Ⅱと事例報告それぞれについて気づきを整理した。
- 2) 全体会1日目(講演Ⅰ・Ⅱ)および2日目(事例報告・全体研修)を踏まえて、「連携が短大を元気にするには？」をテーマとして、事前に経験年数・大学所在地等を考慮して分けた3グループでグループワークを行い、各グループが構想した「短大を元気にする方策」を発表し合った。
- 3) 各グループの発表の後、全員が投票して優秀発表を選定し、その発表内容を第1分科会の基礎とすることとした。

4) 選定されたグループを中心に、3つの発表を踏まえて、第1分科会として「連携が短大を元気にする方策」を全員で討議した。

分科会 3日目

1) 発表準備：全体会での発表に向けての準備

リーダーを中心に役割分担して、発表資料・原稿の作成、リハーサルの実施等を行った。

2) 全員での研修会の振り返り

統一テーマの達成度、分科会活動の成果についての振り返りを行った。

3) 全体会での発表

【 分科会全体 】

第1分科会では、研修会の統一テーマである「連携が短大を元気にする」ことに集中して話し合うことに重点を置き、全体会から分科会へつながるように進行了しました。

参加者の様々な立場（教員・職員）、入試広報担当者としての経験年数や大学所在地など、様々な条件が異なる参加者が一つのテーマに向かって、活発に意見交換をしていただき有意義な分科会になったと思います。また、同じテーマを3つのグループでそれぞれ討議した結果、学内でのデータ分析から始まる連携、学生との連携を基礎として学生募集につなげる学内連携、産官学連携から短大を取り巻く環境を変えていく等、幅広い内容のものへと発展させることができました。

各グループからの発表の後、参加者全員で第1分科会の発表の基礎となるグループを選定し、その内容を改めて全員で討議して発表内容を構築しました。小グループでの活動が基礎となり、各自が的確に役割を分担しながら協力し合って、熱心に作業に取り組んでいました。

14名のメンバーのうち9名が初参加でしたが、運営委員自身が本研修会に参加した際に学んだことや得たこと、自大学で活かしていることを念頭に置きながら説明を行った結果、分科会運営に積極的に協力してもらえたことができたと思います。

さらに各グループでリーダーを決めてもらい、「連携」をキーワードにグループごとに全員が発言し、幅広く活発な意見交換が行われたことも良かったと思います。

第1分科会は、短大プロパーのみのメンバー構成だったため、各短期大学において抱えている諸問題や悩みなど共通点が多く、グループ活動が非常に活発に展開され、参加者からも好評でした。



【 研修会全体運営について 】

「連携が短大を元気にする」という統一テーマは、今後の短期大学活性化の在り方を入試広報担当者の立場で再認識し、視点が広がるテーマだったと思います。講演および事例報告は、普段あまり聞くことが出来ないこともあり、参加者にとって関心が高く内容の濃いものであったと思います。講演については、地域連携の事例から新しい発想を知ることができ、今後のヒントを得るとともに、広い視野で担当者としての業務を行っていくことの重要性を認識することができたと思います。また、事例報告については、データ分析の緻密さ、自大学では全くなかった発想、スピード感のある広報戦略等が、参加者にとって驚きであり、とても参考になったと思います。それぞれの大学や地域で抱えている問題には違いがありますが、地域に密着した高等教育機関として、短期大学が行政や市民と連携・協働することの意義や方策、短期大学の効果的な学生募集・広報の在り方等について、各参加者が自大学で検討できる事項を多く得ることができたと思います。

また、2日目全体会で席替えを行ったことにより、他の分科会の参加者との交流・情報交換をする機会が増えて良かったと思いました。

入試広報担当者と言っても、大学によっては専任や他の職務との兼務、教員による担当等状況は様々です。そのような多様な担当者が集まり、設定したテーマについて学び合い、活発に情報交換し合った成果を日々の業務に活かすことにより、各短期大学の学生募集と短期大学全体の振興につながると考えます。

【 分科会での成果と課題 】

○成果

参加者同士が2日間の研修内容と自大学が置かれている現状、広報担当者としての役割・責務等を基に活発なグループ活動・意見交換を行い、①地域、②短期大学、③学生、④高校生という四者が連携することにより、「短大が地域を活性化させる」という結論にたどり着くことが出来ました。

我々、短期大学が今後生き残っていくために、地域と人材（学生、高校生）と連携して、地域貢献を含めた各種活動の必要性を訴える内容となりました。各参加者が分科会1としての結論（発表内容）を自大学に持ち帰り、研修会での成果を実践に生かしていくことを期待します。

第1分科会は前述のとおり、短大プロパーのみのメンバー構成だったため、各参加者が日常業務で抱えている問題や悩みなどは共通点が多く、情報交換・意見交換を通して課題解決のためのヒントを数多く確認することが出来たと思います。

主な内容は次のとおりです。

①オープンキャンパスの運営の在り方

- ・各短大の所在地や置かれている状況による年間開催回数
- ・参加者を確保した上で出願に結びつける方策
- ・参加予約の是非、開催時間の工夫

②SNSの活用方法

- ・ツイッターとインスタグラムの重視傾向
- ・学生スタッフの活用方法

③短期大学の特色ある連携事例

- ・学科手作りの昼食提供
- ・大学イベントの活用

分科会での活動に関して参加者からは、次のようなコメントをいただきました。参加者の声からも、分科会の当初の目的をかなり達成することができたのではないかと思います。

◆第1分科会参加者のコメント(アンケートより抜粋)

- ・グループが4名という少人数だと意見のまとまりもよく、充実していた。
- ・連携をテーマに行動することの楽しさ、難しさ、私自身の課題を見つけることができた。
- ・分科会でテーマを絞り、情報を共有し、ディスカッションすることで、新しい気づきを得ることができました。
- ・絵をかく場合、人によって見方が違うのと同じで、それぞれ意見も違う。それが形になる行程が非常に楽しかったです。
- ・初めて参加しました。同じ業務にも様々な戦略があると気づかされました。
- ・色々な話が聞けてよかった。困っていることや答えの出ないことは、他の広報の方でも似た想いをしているなど知りました。

○課題

- ・研修会実施にあたって事前に運営委員会であげられた新たな高等教育機関への対応については、参加者によって制度そのものの理解度に差が大きいことが分かり、今後は全国レベルでの共通認識が必要だと感じました。
- ・専門学校との差別化や4年制大学への進学志向が強いことへの対策については、参加者に差異はあるものの専門学校や4年制大学との違い、短大の優位性についての高校に対する説明等に苦慮していることが確認されました。
- ・参加者は本研修会を通して、改めて短期大学の役割、広報担当者としての自分の役割等について、再認識することができたと思います。地域の事情や大学を取り巻く環境に違いはあるものの、短期大学入試広報担当者が共通認識を図り、有益な情報等があれば積極的に情報交換をするなど、相互の連携・協力を強化していくことが、今後益々重要であると認識しました。

第1分科会の皆さん



第2分科会 研修報告

担当：秋草学園短期大学 秋草 誠 委員

【分科会の目標設定】

第2分科会では、はじめに短期大学の募集規模、地域性、経験年数、役職など違った参加者だということを認識し、自由闊達に意見交換できる「場」であることを説明した。各グループで情報交換しながらグループワークを行い、個々の力量を高め研修会や分科会などで得た情報や事例などをそのまま自大学に持ち帰るのではなく、自大学のカタチに合ったダウンサイズができるようにグループワークを行うことを目標とした。そのために「グループの中で出た課題をメンバーで共有し、考えること」が出来る研修とした。

【分科会でのスケジュール】

分科会 1 日目

- ① 自己紹介シート・自大学紹介シートに基づいて自己紹介と他者理解をした。(一人1分間×14名)
- ② 分科会のテーマである「連携が短大を元気にする」の副題として、「学生募集に強くなる短大」をイメージして、翌日からの各グループ(A・B・C)の方向性を意識し、自大学の課題や広報の取り組みについて意見交換をした。そこで決めたテーマをグループごとに発表した。

各グループのテーマ

Aグループ「学生が広報したくなる短大」

Bグループ：「学生募集の費用対効果を高めるために」

Cグループ「理想のオープンキャンパス像」



分科会 2 日目

- ① 3グループに分かれてKJ法を用いながら、相互に情報交換をしながら設定したテーマについて活発な意見交換を行った。
- ② 他分科会の様子などを確認し、様々なキーワードの収集を行った。

- ③ 14 短大の大学案内に投票し、表彰した。
- ④ 3 グループでテーマをまとめ発表し、翌日に発表できる準備をした。

分科会 3 日目

① 分科会まとめ

前日の 3 グループの発表を受け、それを第 2 分科会の発表として一本化するための作業をした。発表のタイトルは、「学生が広報したくなる短大」に決定し、発表は寸劇で実施することとし、その配役やセリフなど細かくチェック作業を行った。



② 分科会発表

ほぼ全員が役割を見事にこなし、連携大賞（優秀）を頂くことが出来、分科会メンバーとして満足できる結果を得ることができた。

【分科会全体】

研修会全体の中で積極的に学ぶ姿勢で参加し、分科会のテーマである「連携が短大を元気にする」から、「学生募集に強くなる短大」をイメージして、3つのグループに分けた。一人の発言を1分以内とし、役職、年齢に関係なく自由闊達に意見交換できる場をつくる意識を持って参加するように伝えた。グループワークを通して、多くの方々と学びあうことで新しいネットワークが出来たことを実感する参加者が多数いた。

今回の研修会のキーワードである「連携」と「元気」を意識して、他大学などの事例などから刺激を受け、グループワークの中で様々なカタチを想定した議論がすすんだ。全大会発表に向けて、「学生が広報したくなる短大」のイメージを作ることができた。

【研修会運営全体】

(運営委員 秋草誠)

講演と事例報告について、参加者は自大学の規模や立場などが違う視点で参加しているため、理解できる範囲が異なると思っている。毎回、メンバー編成する時に考えることは、参加者が自由闊達に意見を

交換できる分科会グループになっているかを重要視している。講演Ⅰ・Ⅱ、事例報告を聞いて、各大学が持つ強みや弱みを加味しながら作り上げた分科会の発表が、評価されたことはとても嬉しいことであった。

各大学の課題を互いに共有し、情報交換ができる本研修会の際は、年々入学者が減り続ける短大の状況を鑑みたSD研修として大変価値のあるものだと再確認できた研修会であった。

【分科会での成果】

参加者同士が、他大学の取り組みや新しい企画などを情報交換したことで、実は問題の根本は同じような原因によって生じていることを理解できたはずである。また、グループワークの中で情報交換することにより、自大学に持ち帰れる企画などを発見し、新たな気づきがあったと感じる。この結果は、分科会参加者のアンケート結果から読み説くことができる。以下は参加者のアンケートから抜粋した。

- ・特定の同じテーマについて、分科会ごとに取り組むというのは非常に面白い。それぞれの分科会ごとに異なるメンバー、異なる切り口で同じテーマが深まると思う。
- ・グループでの話し合いがよかったです。各大学での取り組みが、新たな取り組みとして進んでいけるのではと思います。
- ・一つのものを作るための協力、役割分担、自分はどう動くことが必要か、再度考えるきっかけとなった。
- ・これまでの“連携”をテーマにした講演など踏まえて、チームで作り上げていくことの楽しさを感じられた。
- ・困っていることは他短大も同様に困っているのだと思った。情報を共有できたことや新しい発見もあり、とても有意義な研修でした。
- ・1つのテーマから派生していき、違った角度からテーマをあげることができて、多方向から見ることができました。
- ・各校の実情を踏まえながら意見交換ができ、よかった。



【研修会全体課題】

短期大学を取り巻く現状は、年々厳しくなっている中で、各大学の運営者にとっては研修した成果を持ち帰って自大学に役立ててほしいという期待がある。この期待に応えるためにも、本研修会の参加者の期待と満足度をいかに上げ、自大学の広報に役立てる人材の育成が今後の大きな課題となってくる。

多くの職員が抱えている問題は、他大学から良い情報や取り組みたい企画を得ても自大学に持ち込むことが出来ないジレンマを感じている人が多くいる。

また、根本的に研修会に参加しなければ、他大学の新たな取り組みや企画などの情報を得るネットワークを持っていない方が多い。研修会の一番のキモは、全国の短大の広報担当者とのネットワークを構築することと、良い情報や取り組みたい企画を参加者が自大学にあう形にダウンサイズして持ち帰れる能力を身に着ける研修会としたい。

第3分科会 研修報告

担当：富山短期大学 小比賀 誠 委員

【 分科会の目標設定 】

第3分科会は14名（委員含む）で、北海道、東北、関東、北陸、愛知、関西に立地する基本4大併設の短期大学部からの参加者でした。委員を除く入試広報業務の経験年数は、全体平均で約6年、1年以上5年未満の方が7名、5年以上10年未満が3名、10年以上が3名という構成でした。予め全体を3グループに分け、経験年数の長い方を各グループに配置、5年未満の方を男女比や県・地区、年齢を考慮して、小グループ内で発言しやすい環境になるように配慮しました。

第3分科会での成果目標としては、研修会全体の「連携が短大を元気にする」をベースとして、「対話を通じた情報交換」と「悩みや課題の共有」、そして「自ら進んでその解決策の模索・発見を行い、その結果をメンバーと共有する」ことに設定しました。

日常業務において、どんなことに課題や疑問を持っているかを全員で出し合い、メンバー間で意見交換し、その解決の糸口をこの研修会を通じて築いた連携の中から見つけ出して共有してもらい、日常業務に役立てていただきたいと思います。

また、最終日の全体会発表のテーマは、メンバー共通の課題に絞り込み、今回の研修会を通して得られた気づきや解決策を、その成果として全員協力の下で発表する事を目指しました。

【 分科会でのスケジュール 】

分科会1日目

- ① 名刺交換、運営委員挨拶
- ② 自己紹介（事前に様式を作成・配信し、当日各自持参。1人2分で紹介）
- ③ 第3分科会の目標設定と分科会の進め方について説明
- ④ 小グループ分けの発表及び日程確認、事務連絡

分科会2日目（⑤～⑦は小グループ別ワーク、⑧以降は全体討議・ワーク）

- ⑤ 講演Ⅰ・Ⅱ、事例報告、全体研修の振り返りと気づきの共有
- ⑥ 各短大で抱えている課題等についての情報交換（各短大から持ち寄ったキャンパスグッズ、オープンキャンパスチラシ、大学案内、小冊子等も積極的に活用して討議）
- ⑦ 各小グループで共有できた内容のまとめと発表（各5分）
- ⑧ 新高等教育機関、専門学校と短大を取り巻く環境についての意見交換、情報共有
- ⑨ 各グループ共通課題の絞り込みのための全体討議



- ⑩ 全体会発表の内容のまとめと課題解決策の話し合い
- ⑪ 全体会発表の方法の検討と役割分担の決定
- ⑫ 全体会発表の準備・リハーサルの開始

分科会 3 日目

- ⑬ 全体会発表の準備・最終リハーサル
- ⑭ 今回の研修会全体に関する振り返り
- ⑮ 全体会発表



【 分科会全体 】

第3分科会の参加者は、入試広報業務の経験年数や教員・職員の隔たりなく、分科会初日から全員が積極的に発言され、闊達な意見交換や情報共有ができて大変良かったと思います。

特に、各短大が抱えている課題等をフリートークする時間では、現場担当の若い方から多く発言が出され、メンバーからは自校の取り組み状況や同種の課題に対する成功事例・失敗事例等が次々と報告されました。入試広報業務に携わる者同士が、地域や学校間の垣根を越えて、同じ土俵上で意見交換し情報共有する様子は、正しく今回の研修会テーマと分科会目標に沿った展開でした。

単なる情報交換や経験談の披露の域を超え、入試広報担当者としての対応やマインド、業務に取り組む上での注意点と具体的な方策や失敗事例に至るまで、かなり掘り下げて闊達に話し合われました。委員は論点の軌道修正と時間調整する程度の関与で十分でした。

これらの意見交換は、各小グループ内で更に踏み込んで共通の課題を発見して頂き、フリップにまとめて発表していただきました。また、皆さんに持参をお願いしたキャンパスグッズやオープンキャンパスのチラシ、大学案内等も、この話し合いの中で適宜使用され、参考になるものは持ち帰りもされていました。

その後、各グループから出された共通の課題を再共有し、「オープンキャンパスで学生・教員・職員の協働・連携・意思疎通が取れていない」点に絞り込み、この課題と気づきについて全員でもう一步深く掘り下げ、全体会で発表することとしました。このテーマに落ち着いたのは、2日目の事例報告で、「オープンキャンパス参加者からの7割出願を目指す」という仙台青葉学院短期大学の取り組み説明が、初日の講演Ⅰ・Ⅱと繋がった結果、メンバーに強く印象づけられたためではないかと推察されます。本研修会は、各メンバーにとって「明日からの学生募集活動で直ぐに活用出来るヒントを沢山持ち帰ること」も、参加の大きな目的の1つであることを強く感じ取りました。

この3日間は、メンバー全員が絶えることなく話し合い、質問を投げかけ意見交換し、体も動かしながら多くの共感・共有・発見ができた有意義な時間であったと考えます。

【 研修会全体運営について 】

全体会の講演、事例報告は大変満足できる内容であったと思います。委員である私も、多く

を学ばせて頂きました。また、2日目の午前中は座席をシャッフルしたことにより、他の分科会の方とも情報交換でき、連携や参考意見の幅も広がって、大変良かったという参加者からの声が多かった様に見受けられます。

この研修会の根底には、参加者自らが日々の業務に対して課題意識を持ち続け、その解決の糸口と元気を、同じ課題を持った他の参加者と共に考え、対話し共有する中から見出して、翌日からの業務に役立ててもらおうという趣旨が、過去から一貫して流れています。

今回は、この流れをベースに「連携」が短大を元気にするというテーマ設定であり、様々な連携から見えてくる課題解決の糸口を、本研修会を通して見出していただけたことが、今回の研修会実施の大きな意義だと考えます。

研修会運営委員の一人として、全参加者の皆さんに、学内外広報の重要性と各方面との連携の必要性を再認識頂き、今後更に厳しさを増すであろう短大の学生募集・入試を乗り切るための英知とヒントを得て、毅然と立ち向かう元気を共有していただきたいと願っていました。

入試広報業務は、大学の定員充足という大命題を遂行するために、可能な限りの手段・方法人材に訴えて、学生募集活動を通年で展開しなければなりません。その業務内容の性質から、周囲より業務遂行に対する意識差が生じやすい点もあります。この研修会は、こうした課題の解決手段の1つとして今回の「連携」の重要性を認識してもらい、参加された皆さんの今後の活動の方向性を見定めていただくための礎になったと思います。

【 分科会での成果と課題 】

成果

分科会メンバーからは、最終日の分科会時に、次のようなコメントを寄せて頂きました。

- ・話しやすい雰囲気でみんなと意見交換する中から、想像以上の多くの気づきが得られた。
- ・広報する上での課題や悩みが共有でき、違った物の見方・考え方に大変刺激を受けた。
- ・学内連携の大切さに気づかされた。オープンキャンパスでは、教職員の連携ばかりが気がかりだったが、学生も含めた大学内連携の重要性を再認識して目から鱗だった。短大に戻って出来るところから早速実践してみたい。
- ・普段競合関係にあった関係でも、みんな同じ課題を持っていることがわかった。このような関係作りが出来るとは夢にも思っていなかった。今後は共に情報交換をして、短大みんながWin-Winの関係となるように努力したい。
- ・共通の課題は「定員充足」。学生募集のキーはオープンキャンパスだと思う。いかに集客して、出願・入学に結びつけてゆくかの良いヒントを得た。専門学校には負けたくない。
- ・今まで自分のやってきた方向性が間違っていなかった事が、研修会を通して確認できた。
- ・みんなと話し合い、意見を述べ合い協力して1つのものにまとめてゆくことは素晴らしい。
- ・初めは3日間が長いと感じていたが、参加して短すぎると思うほどにこの研修会は充実していた。
- ・この分科会メンバーが1つの大学の入試広報部隊だとしたら、「鬼に金棒」だと思う。この

研修会を通じて知り合った方々と、今後も良きアドバイザーとして連携を続けていきたい。大学は異なっても、共通の課題を持った入試広報担当者同士が、研修会という非日常の場に集い積極的に情報交換することで、今まで為し得なかった「連携」が生じ、課題解決のための糸口を多角的に模索する時間を持っていただけたと思います。研修会参加にあたり、分科会メンバー各自が明確な課題とその解決意識を持って参加されていたことが良かったと考えます。

但し、反省事項として、3日目の分科会では全体会発表の準備・リハーサルに追われ、メンバー全員で研修会の振り返り時間を十分確保できなかった点が、委員として悔やまれます。

課題等

- ・入試広報業務の経験が浅い方から、高校教員や高校生、保護者等に対する学生募集のアプローチの仕方や説明の方法が分からない、或いは説得する技術に欠けるために経験者から教えて欲しいと言った声も聞かれました。経験年数が浅い方を対象とした学生募集対応のスキルアップが可能な研修機会を提供しても良いのではないかと思います。
- ・新高等教育機関に関する情報への関心が乏しい方が多いように見受けられました。今後、短大の脅威ともなる新高等教育機関について、専門学校と合わせてその対策を考える機会を設けても良いのではないかと思います。
- ・各分科会で実施する研修内容について、方法や進め方は研修委員に委ねるとして、全体的に基本的な内容や目指す着地点等を、予め委員会で決めておいても良いと思います。
- ・短大プロパーと四大併設の短期大学部の場合とでは、募集活動や組織形態が異なるケースもあり、業務への取り組み方に違いがあると考えられます。事前又は参加申込時に何らかの調査項目を設定しておく、分科会分けの際にも参考にできると思います。
- ・研修会参加者が、自校に戻って研修成果を他の職員に広めて頂くことを考えて、学内でも使用してもらえるように、研修会で使用する様式等の白紙を、当日配布する研修用冊子に載せるなどの検討をしても良いのではないかと思います。
- ・日短協のホームページに、研修会の様子を写真とコメントでアップすれば良いと思います。

第3分科会の皆さん



全体会発表の様子(第3分科会)



第4分科会 研修報告

担当：修文大学短期大学部 六浦 政人 委員
仁愛女子短期大学 後久 真嗣 委員

【 分科会の目標設定 】

初見の方々がコミュニケーションをスムーズに行える環境の構築（＝チームビルドの根幹）と組織活性、及び他短大の広報担当者との意見交換を通して自校の広報に活かすことができる施策を模索することを目標とした。この目標を達成するため、参加者14名（29日のみ参加：1名）を①所在地 ②収容定員 ③男女比率 ④年齢からA～Cの3グループに分け、参加者が自由に情報交換できるように分科会進行を行った。分科会進行では、参加者の討議したい内容で議論を進めていくこととし、その中で、結論を見出すことを重要視せず、知恵を出し合い目的に向かうための最善の方法を探し出すプロセスやロジックを重要視し、初日は自己紹介で「自己・他者の理解」の下にお互いの理解を深め、2日目以降の分科会では、様々な制約を無視し、企画の目的をロジックツリーのトップに置いて誘引～施策～フォローまでの案（方策）を各々で考え、各グループ内で討議～分科会内での発表を行った。

【 分科会でのスケジュール 】

分科会1日目

- ①初日のワークショップを受け、事前に作成を依頼した自己紹介シート・大学紹介シートで、自己紹介と他者理解を行った（自己紹介の時間は、一人2分程度）。
- ②自己紹介後、各々が持ち寄った短期大学の大学案内やオープンキャンパスツール等の中で良いと思われる制作物の上位3校の投票を行い、翌日上位3校の担当者には表彰（賞品贈呈）を行った。※制作物等については交換を行い、様々な点について意見交換を行った。
- ③2日目以降の分科会進行について説明を行った。
- ④情報交換懇談会では、お酒を触媒としてさらに「自己・他者の理解」を深めた。

分科会2日目

- ①A～Cの各グループに分かれ、討議したい内容（分科会として討議する大テーマ・各グループの小テーマ）を各グループでブレストの上、決定し討議に移った。
討議する大テーマは「オープンキャンパス」。
グループごとの小テーマは、以下の通り。
Aグループ：「オープンキャンパスの満足度UP」
Bグループ：「オープンキャンパスのリピート率UP」
Cグループ：「様々な“連携”を生かしたオープンキャンパス」

各グループの中で各々が有機的に働きかけながら、ベターと思われる討議内容に対する方策をブレストしながら組み立てた。

- ②組み立てた討議内容に対する方策を分科会内でプレゼンテーションできるように、模造紙に記入し、各グループ5分間のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーション後、翌日の全体発表に向け更なる内容のブラッシュアップ（「キラーコンテンツはどこにあるのか」「その施策にストーリー性はあるか」を明確化）を行った。

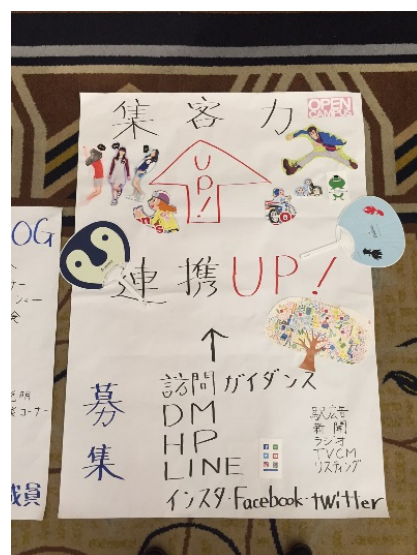
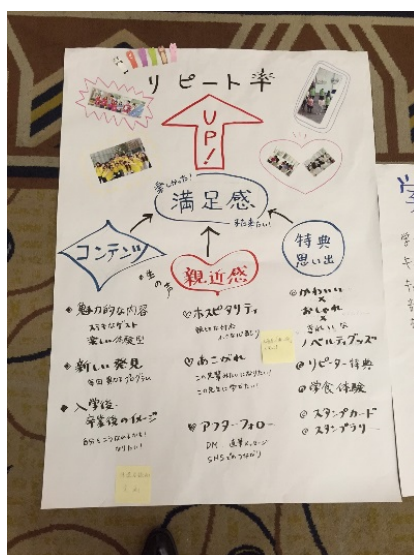
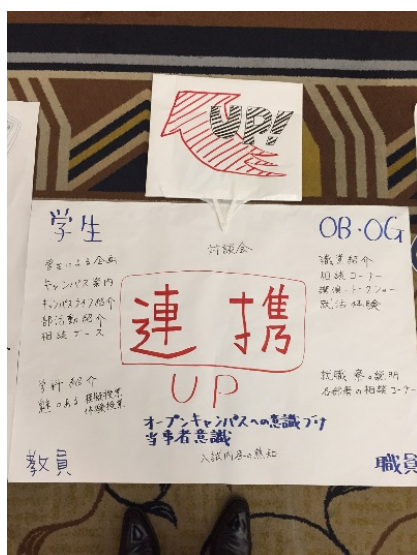


分科会 3 日目

- ①ブラッシュアップさせた内容を再度模造紙にまとめ、分科会内で発表（2分程度）を行い、全体会での発表に備えた。
- ②各グループの討議内容に対する方策を統合し、（全員で）ストーリー性を持たせた内容に組み直し、再度、まとめた方策を制限時間の5分間で発表を行うなど、発表に向けて準備を進めた。
- ③全体発表

【 分科会全体 】

分科会を通して、様々な地域や環境・規模で構成された各グループで、これまでの経験や様々な考えを融合させ、新しい目線を創造し、普段の業務では行うことの少ない「知恵を出し合う」というプロセスがいかに大事かということを学んでいただいた。また、全員で考えた案を発表することで、能動的に働きかけるスイッチが押され、受動的になっていた姿勢に変化を与え、それぞれが他者に働きかけることで組織が活性化できるという認識を持っていただいた。最終日の全体発表では「チームワーク賞」を獲得し、目標であった組織形成～活性の達成という結果を残すことができ、短時間でもチームビルドは可能であるということ意識していただくことができた。



【 研修会全体運営について 】

研修会の目的は、広報担当者のスキルアップではなく、「変化の機会を与える・授かる」ことだと思われる。『傾聴』『考えぬく』『他者のいいところを吸収する』という行為に気づき、業務に生かす」という小事が、最終的には組織活性につながるはずである。短大は、自由競争の中で非常に厳しい状況に立たされており、新たな組織が形成される前に、短大全体として打つ手を講じ、「一枚岩」となって立ち向かうことが重要である。今後も会員校に対し、本研修会の重要性を理解していただけるよう努力を重ねていきたい。



【 分科会での成果と課題 】

◆成果◆

本研修会のテーマである「連携が短大を元気にする」の意味を様々な面から理解していただき、連携することの意義や素晴らしさを日常業務に波及させるお手伝いが微力ながらできたのではないかと思います。また、参加者同士の交流を深めていただき情報交換ができる環境を構築できたことも成果のひとつにあげられる。

- ・ 様々な地域・環境・規模で構成された各グループの中で、各人が得たこれまでの経験や様々な考えを融合させ、新しい目線を創造できた。
- ・ 普段の業務では行うことの少ない「知恵を出し合う」というプロセスがいかに大切かということを学ぶことができた。
- ・ 全員で考えた案を発表することで、能動的に働きかけるスイッチが押され、受動的になっていた姿勢に変化を与えることができた。また、それぞれが他者に働きかけることで組織が活性化できるという認識を持つことができた。

◆第4分科会参加者のコメント（アンケートより抜粋）◆

- ・ 多様な取組みを情報交換するなかで、効果的な取組内容が焦点化され、生きた学びとなりました。
- ・ いろんな視点からの意見をたくさん聞くことができました。全員が活発、積極的で楽しく学びました。
- ・ 一つのものを作り上げる難しさを知りました。
- ・ 仲良くなりネットワークができて良かったです。普段の業務の相談もでき、良かったです。
- ・ 分科会のメンバーと連携しながらアイデアをだし、一つのものを作り上げられて、とても良かったです。
- ・ 他の方の意見を聞くことは、とても大切だと感じた。自校に帰っても、分科会でのことを活かしていきたい。
- ・ 各大学の事例交換をもとに様々な話ができました。
- ・ すばらしいチームでした。他の大学と比べた内容について参考になりました。

◆課題◆

参加者アンケートでは概ね高評価を得ることができており、参加者には満足のいく研修を提供できたのではないと思われる。しかし、参加短期大学は81校と会員校の3分の1程度に留まっており、参加率が高いとはいえない。また、参加者は経験の浅い職員が多く、長くキャリアを積んでいる中堅以上の職員の参加は少ない。短期大学全体の振興のためにも、多くの短期大学から幅広い年代の広報担当者が集まる研修会になるように、内容等を検討すべきである。なお今一度認識したいことは、敵対すべきは隣の短大ではないということ。これからは、新しい学校種や専門学校等に対抗すべく知恵を出し合い、短大という組織が一枚岩で対抗できる策を講じることこそが重要になるため、こうした施策についても話し合い、検討することができる機会を研修会の中に組み込んでいくことも検討すべきである。

第5分科会 研修報告

担当：大手前短期大学

島崎 千江子 委員

豊橋創造大学短期大学部

平松 靖一郎 委員

【 分科会の目標設定 】

第5分科会は、研修会参加にあたって、全体会で取り上げるテーマ(キーワード)でもある「連携」について、自分が所属する大学におけるケースについて事前に考えて来てもらうことを課題としました。また、事前アンケートで提示したいいくつかのテーマ(項目)についても、参加者個々の大学における取組状況について具体的な振り返りをして参加するように促しました。そうすることで、研修会に参加した際には、積極的な意見交換が行えることを期待しました。意見交換することで、今までの自分に無い視点を持つと同時に新たな気づきに基づく具体的な自分自身の有り様を見つけ、自大学での業務に役立てていけるようにすることを目標として進めました。また、この第5分科会では、分科会内の小グループについて、ローテーションでメンバーの入れ替えを行い、できるだけ多くの参加者との意見交換ができるように配慮し、参加者相互のネットワーク作りにも努めました。自分と同じように課題を抱えながらも頑張っている同志を知ること、そのことを「元気の源」にしてもらえるようにしました。



【 分科会でのスケジュール 】

■分科会1日目

1. 自己紹介／事前に作成を依頼した自己紹介カードを使用して、自己紹介と自大学の連携事例について発表してもらいました。発表時間は、一人3分。

参加大学が持ち寄った連携事例〔抜粋〕

- 九州地区私立女子大学入試・広報連絡会 /九州女子短期大学
- 小田急沿線の魅力を発信するフリーペーパー /文化学園大学〔部〕
- 消防・防災サークル京都学生 FAST「KFG」 /華頂短期大学
- うつのみや食育フェア /宇都宮文星短期大学
- ガンバ大阪応援プロジェクト /大阪青山大学〔部〕
- 社会人教養楽部 /札幌国際大学〔部〕
- チャレンジキッズフェスタ /群馬医療福祉大学〔部〕
- うたのおにいさんおねえさんスマイルコンサート /鳥取短期大学
- 地域子育て支援センター「くれまちす」 /岐阜聖徳学園大学〔部〕
- 地域子育て支援フォーラム /金城大学〔部〕

2. 講演Ⅰ及びⅡの感想を出し合いました。併せて他大学の連携事例について、質疑応答をしました。「連携」から生まれる大学の活気について、「気づき」を促す時間としました。

■分科会 2 日目

1. 討論／講演 I 及び II、そして事例報告を聞いて、「自大学でも実践できそうなことはないのか」という視点で意見交換を実施しました。

また、参加者それぞれの大学において、学外連携だけでなく学内連携をどのようにしているのかなど、日頃、学内で情報交換する機会の少ない点(聞きにくい点)についても、参加者相互に意見交換を行いました。そうすることで、研修会参加者が、研修会参加後、自大学において今までとは少しでも異なる学内連携に関する行動を起こすことができるようになることを期待し、新たな学外連携や学内連携を模索するためのイメージを膨らませる機会としました。

このほか、ファシリテーター(豊橋創造大学〔部〕)からは、地域の公立高校と大学が連携して実施している『ラーニングフェスタ』という高大連携事業に関する資料を配布し、この高大連携事業を実施するに至った経緯や円滑に進めるための秘訣についての紹介をし、参加者のそれぞれの地域における高校と大学との高大連携事業の現状把握と、それぞれの地域にあった提案を考えるヒントについても、考えてもらいました。

第三河 浜松地区高大連携協議会主催
ラーニングフェスタ 2016
大学の講義を通じて、新たな興味を発見しよう!

参加大学名
 豊橋技術科学大学 慶知大学 豊橋創造大学 慶知理工科大学 静岡大学工学部 静岡文化芸術大学
 浜松学院大学 常葉大学 監獄クリストファー大学 静岡理工科大学 慶知大学短期大学部
 豊橋創造大学短期大学部 慶知理工科大学自動車短期大学 浜松学院大学短期大学部

日時 平成28年8月25日(木)
時間 9時30分～13時50分 受付9:00
会場 豊橋創造大学 愛知県豊橋市牛久保松下20-1
 TEL. 050-2017-2100 FAX. 050-2017-2113

内容 高大連携事業
 第三河 浜松地区高大連携協議会加盟大学の教授陣が、様々な分野の専門講座を講義。専門講座は、皆さんの興味と関心に合わせて選択受講が可能です。講座案内をよく読んで選択してください。様々な講座を受講することで、あなたの視野が広がります。




バスの時間 片道240円(往復480円) ※当日バスの増便を予定しています。乗降時に1分のご乗車をさせていただきますので、高校からの案内に従ってください。

| 行き | | 間に合う講座 | | 帰り | |
|-------|-------------|--------|-----|-------|--------|
| 豊橋駅前 | → 創造大正門 | 1限 | 3限後 | 創造大正門 | → 豊橋駅前 |
| 8:22 | 8:37 | 1限 | 3限後 | 12:31 | 12:45 |
| 8:35 | 8:50 | 1限 | 3限後 | 13:05 | 13:19 |
| 9:10 | 9:25 | 1限 | 4限後 | 14:41 | 14:55 |
| 9:40 | 9:55 | 2限 | 4限後 | 15:05 | 15:19 |
| 10:05 | 10:19(創造大東) | 2限 | 5限後 | 15:41 | 15:55 |
| 10:40 | 10:54(創造大東) | 3限 | 5限後 | 16:05 | 16:19 |

2. 討論／時間を区切って小グループのメンバー入れ替えを行い、引き続き、連携をテーマに意見交換を行いました。前日から親交を深めてきた結果、参加者相互に、他大学の良いところを出し合ったり、改善案を意見してみたりと、様々な立場の参加者が集まっての意見交換ということもあり、新たな気づきにつながる議論の展開がなされていました。分科会の後半には、複数の参加者から、「他大学の良いところを取り入れて、新たな企画に取り組んでみよう。」という声もだされるなど、参加者が新たなやる気を示してくれている様子がみられ、うれしく思いました。

情報交換／持参してもらった大学案内やキャンパスグッズを相互に交換し、アイデアの交換を行ないました。予算の制約もありますが、他大学がどんな意図で制作しているのかなども聞くことのできる情報交換となり、今後の自大学での展開のヒントになりました。

■分科会 3 日目 プレゼン案の作成とプレゼン発表

1. まとめ／分科会 5 は、前日までの気づきに基づき「連携」をテーマとして、「入試広報担当者のあるべき姿」についてまとめたものを発表することになりました。発表内容を取りまとめている参加者の姿は、それぞれが自大学に戻ってからの学内での業務への取り組む姿勢に照らし合わせて考えているようで、研修会の成果を感じられるものでした。

また、2018年問題などが他人ごとではないという自覚も得られたと思います。



第5分科会の発表骨子

『学内連携を強化して「2018年問題」を乗り切ろう!』

「教員」主導や「職員」主導、「教員」「職員」主導ではなく、「学生」も巻き込んだ連携をすることで、高校生目線に立った広報を行うことができ、結果として学生募集につながる。この「教員」「職員」「学生」の学内連携を円滑にするためには、入試広報スタッフがしっかりと意識改革とハンドリングをしなければ、「学内連携」は進まない。このことをクローズアップした発表を行いました。



2. 全体発表/同じような事柄を発表する際にも、発表者の発表の仕方一つで大きく印象が変わり、伝わり方も変わるということを確認できました。このことは、日常業務でもある高校訪問の際の自大学のプレゼンテーション(説明の仕方)の難しさと大切さについても改めて考える機会となりました。

最後に全体発表の結果についてですが、連携大賞(最優秀賞)をいただくことができ、分科会参加者の充実感も一層高めることができ、良かったと思います。



【分科会全体概要】

今年度(平成28年度)の研修会では、募集環境が厳しくなる中、『連携が短大を元気にする』と題して、情報共有に加え自己と自己を取り巻く環境を再度見つめる機会となるよう研修内容を企画して実施しました。

全体会では、「まちなかキャンパス長岡」で知られる長岡市の講演と地元短期大学(聖和学園短期大学)の地域貢献(連携)事例の講演や、学校法人北杜学園(仙台青葉短期大学)の学生募集事例について報告をしていただきました。分科会では、これらの講演や事例報告を踏まえて、参加者個人の知識や意識・手法等の情報交換をすることで、参加者個々の力を高めていくアイデアやヒントを意見交換しました。

第5分科会の特徴としては、参加者の2/3が経験年数3年未満という経験の浅い参加者が多く、日頃学内で日常的に取り組んでいることも、実は今回のテーマでもある「連携」が大切であるということあまり自覚する機会もないまま取り組んでいる状況の参加者も見られました。そのため、研修を進めていく過程で、いかに「連携」が大切かということに気付く機会となった参加者も多くいた分科会であったと感じました。研修会を通して、参加者同士が悩みを共有し、膝を付けて考えていく中で、短大同士の連携や地域の連携を感じ取ると同時に元気を分かち合い、再び日常業務に戻っていけるよう展開できたと感じています。



【 分科会全体運営のまとめ 】

分科会参加者の経験年数や担当部署歴が異なる中での分科会全体の運営は、毎年、手探り状態です。積極的に参加してくれる参加者もあれば、受け身で参加する参加者もあります。また、経験年数が浅く、話題の多くが初めてという参加者もあります。

しかし、この入試広報担当者研修会が16回もの歴史を重ねてきた事実は、参加者が少しでも話題に入りやすくなるように、1/3 前後参加していただいているある程度の経験年数を重ねた参加者やリピーター参加者が、積極的に話題提供してくれているおかげだと、今回も大いに感じた研修会でした。

言うまでもなく、ファシリテーターが参加大学の情報をしっかりと把握して、参加者との接点を上手く引き出していくことも大切です。参加者だけでなくファシリテーターを担当する者も常に研鑽を深めて貢献できるよう努力する姿勢が求められていると感じています。

研修会初日に行われる全体会終了後の最初の分科会では参加者すべての意識を、受け身ではなく**積極的に発言するという意識**を芽生えさせるなど、しゃべりすぎることなく、相手の発言をしっかりと聞く**傾聴の姿勢**を意識させる雰囲気を持てることが、研修会の成果を決めると思います。このことは、学内会議における個々の教職員に求められる姿勢でもあります。第5分科会は、研修会の各プログラムにおいて比較的積極的に参加することができたと思います。研修会終了時には、第5分科会としての情報交換ネットワークも生まれ、**研修会終了後も活発に情報交換が行われていることは、研修会終了後の日常業務の遂行上、大いに役に立っているものと確信しています。**

【 研修会の成果と課題 】

日本私立短期大学協会が実施してきた入試広報担当者研修会は、日頃、それぞれの大学が地域の中で近隣大学と競争(切磋琢磨)している状況下において、なかなか近隣大学には聞くことのできない事柄などについて学べる希少な場です。研修会の参加者からは、参加してみて初めて、同じ課題を抱えている同志がいることに気付くとともに、情報交換(連携)ができる**同志が得られたのではないかと思います。**全体会での基幹テーマに基づく講演や事例報告はもちろん、**参加者の多くは、これまで何気なく取り組んできたことに「疑問」「関心」の視点を持つなど、常に業務改革が大切であるという姿勢が身に付いたことは成果であり、以後は是非とも自大学での日常業務へのフィードバックを実現させてほしいと期待しています。**

最後に、今後の課題について取り上げてみたいと思います。研修会参加者の満足度を、研修会に参加したことのない会員校や会員校教職員に対して、しっかりと情報発信していくことは、大きな課題であると考えています。また、比較的経験年数の浅い参加者が多い研修会という観点で言えば、日頃学内で日常的に取り組んでいることも、実は今回のテーマでもある「連携」が大切であるということをあまり自覚する機会もないまま取り組んでいる状況の参加者も見られました。このことから、この研修会を通じて自大学業務への成果となり得るよう、スキルアップのための業務上必要な情報や事柄について、資料集として取り上げるだけでなく、正しい解説と理解に向けた研修内容や、経験年数に応じた階層教育的なプログラムの必要性についても、今後、検討していくことも課題と考えられます。

よって、協会としての短大全体の活性化に向けた取り組みと同時に、個々の会員校のニーズをしっかりと吸い上げて担当者が日常業務に活かせるような成果を念頭に置いて、両輪で検討しなければならないと感じています。

第6分科会 研修報告

担当：大阪城南女子短期大学 山田 純 委員

【 分科会の目標設定 】

研修会全体の目標や内容を共有しながら、分科会の目標を「マンダラートで課題解決」(やるべきことが見えてくる)と、「連携が短大をみなさんを元気にする」と設定しました。その上で「小グループメンバーの発言をバランスよく」「全員を主体とする分科会」をテーマとして取り組みました。マンダラートとは、マーケティングで使用される手法で、3×3の9マスの中心から放射状に広がるイメージでアイデアを発想することを、仏教の世界観を視覚的に表した曼荼羅（マンダラ）と重ねて、マンダラを使う技術（アート）という造語のマンダラートと名付けられました。課題解決や課題共有等に優れています。また、目標達成のために使うこともできる手法です。

前述の目標設定のもとで、日常の業務において「優先課題を見つけること」「課題をメンバーで共有すること」が重要であることを再認識いただきたいと考えました。さらに専門職短大への対抗策を分科会全体で共有し研修したいと考えました。

【 分科会でのスケジュール 】

分科会1日目

- 1)運営委員挨拶と講演Ⅰ・講演Ⅱ振返り
- 2)自己紹介と各自優先課題の共有
- 3)分科会内小グループ分け
- 4)マンダラートの解説と小グループ課題整理
- 5)課題についての話し合い
- 6)マンダラート1枚を使って見えてきたことを分科会内で発表・翌日に続く



分科会2日目

- 7)2日目の事例報告・1日目の講演Ⅰ・Ⅱを受けての振返り
- 8)マンダラートを9枚を使用しての1日目から継続した話し合い
- 9)「理想の●●」というテーマで、高校訪問・オープンキャンパス・冊子等作成を分科会内で発表
- 10)新しい高等教育機関や専門学校・短大を取り巻く環境の説明
- 11)ディベート的な観点で専門学校側の立場から「専門学校はどのように魅力的なのか」をマンダラートを使用して小グループで話し合い
- 12)分科会内で11について発表
- 13)「専門学校・専門職短大に勝ち抜くために」という共通テーマをマンダラート9枚を使用して小グループで話し合い
- 14)分科会内で13について発表

分科会 3 日目

- 15)全体会発表のための準備・リハーサル
- 16)分科会全員での研修会全体を振り返り。
- 17)全体会発表へ



【 分科会全体 】

入試担当部署経験年数や社会人経験年数、地域特性など異なる部分を理解した上で、分科会参加のみなさんが積極的にバランスよく発言してくださり良かったですと思います。特に課題の共有について、特定の人物の考えによる議論ではなく常に小グループ全体の意見を聞きながら共有していただきました。ベテランの方は若手の意見を引き出し、若手はリーダーシップを取りながら小グループを引っ張っていました。分科会のメンバーのみなさんのお蔭です。参加者から「短大に戻ってからさっそくマダラートを使った業務改善を行っている。」との連絡も複数いただきました。

1人の発言時間の制限や、約30分を1コマとして次々に課題・発表をお願いするなど大変忙しいスケジュールでしたが、その中でのバランス良く積極的に取り組む姿勢はいつもながら私が学ばせていただきました。

自らの短大や経験談による情報交換に留まらない研修にできたことは有意義でした。ただし専門職短大についての情報には大きな格差があり、短期大学全体として対抗するには共通した課題意識を持つことが重要だと考えます。

【 研修会全体運営について 】

全体会の講演や事例報告も素晴らしく満足度も高いものであったと考えます。2日目にテーブルメンバーを変更したことも参加者の情報交換や連携のため良かったと思います。

この研修会は、押し付けられた価値観の共有だけでなく、自ら考え他短大の仲間と考え出した価値観の共有ができることが最大の強みだと再確認できました。

今後の課題としては、参加者の個別の課題に一定の満足度を得ながら全体会の内容と分科会の内容の連動を進めることあげられます。

入試広報担当者は、学外への活動を担う業務の特殊性から、学内での平均的意識との差が生まれ、日常業務で迷いやすいと思われます。学内広報の重要性＝学内連携の重要性を認識するとともに参加者が本研修会で自らの活動の方向性を再確認できればと考えています。

短大取り巻く厳しい状況の中でさらに環境は大きく変化しそうです。このような時だからこそ、本研修会の存在意義を確認することができました。

【 分科会での成果と課題 】

成果

分科会の目標「マンダラートで課題解決」について

- ・闇雲に「頑張ってオープンキャンパスに動員する」「オープンキャンパスの内容を良くする」「高校訪問を充実させオープンキャンパスに誘導する」「良いパンフレットを作成して受験生を増やす」などという業務課題に取り組んでいたが、マンダラートを使用することにより、1つ1つの課題について、共有しながら優先順位をつけることができるようになりました。
- ・「教員や他分掌の職員が募集活動への意欲がない」と言ってきたが、教員や他分掌に要求のみをする失敗をしていました。募集活動への課題を共有することにこそ時間を割くべきです。それも一方的な説明でなく、共に作り上げて共有しないとダメだと気付きました。教員や他分掌が募集活動への意欲をなくしていたのは、一方的に要求のみをする入試係にも原因があること気付かされました。大きな大学でない小規模な組織が多い短期大学こそ、課題の共有(=連携)がキーワードとなり、連携が果たせた時には組織としての強みとなると考えます。
- ・マンダラートは非常に優れた課題解決手法なので、すぐに学内研修や課内での課題解決に取り入れます。自学が競合に勝つために行動していきます。

小グループでの話し合いや分科会内発表等で見えてきたこと

- ・「学生を主体としたオープンキャンパス」を掲げていたが、学生がやってみたいプログラムや感想以外、学生に意見を求めてきませんでした。オープンキャンパスで学生を主体にしなければならないのは当然なので、自学の課題も含めて学生に伝え、企画段階から学生とともにオープンキャンパスを再構築していきます。一部のプログラムだけ任されても学生が意欲的でないのは当然でした。
- ・説明(=プレゼン)について、今まで「1 テーマを 30 秒や 60 秒」という長さで意識して話をしたことがなかったです。30 秒や 60 秒意識をするとその難しさに気付きました。高校生や高校の先生などと話をする時にトータル時間だけでなく、1 テーマについての時間の長さも意識して話をしていきます。自学の課内でも統一して練習していきます。
- ・高校訪問で大切なのは、高校の先生の立場での情報提供です。今までは自学側が伝えたいこと(=高校訪問で言えと指示されたこと)を話していました。高校の先生が真剣に聞いてくれない理由を、高校の先生の責任や受験生が少ないことにすり替えていました。高校訪問を有意義なものにするためには、まず高校の先生にとって意味のある情報提供をしていかなければなりません。在学生の様子を含めて、いきなり自学の話を一方向的にするのは今後改めていきます。
- ・冊子等を作成するのに大切なのは見る側の立場で、要点を絞ることです。要点を絞り特定の特徴に注目が集まるように冊子を作成していきます。文字だけが多い、大人でも理解しにくい説明文で受験生に理解を求めていくことは改めなければいけません。

- ・ 高大連携や地域連携も大切だと思うが、一番肝心な「学生との連携」ができていないと何もできないです。高校訪問やパンフレット作り、WEBサイト作りやオープンキャンパス計画全てに学生の力は必要です。そのためには、イベント時だけでなく普段からの「学生との連携」が必要です。そして、エンrollment・マネジメントを意識した入試係となっていきます。
- ・ 短大の魅力や高校生や保護者に伝えるのは難しいです。しかし、難しくしているのは短大側かもしれません。理念や学位の魅力、専門学校との教養の差などを高校生が納得いくように噛み砕いて説明できなければなりません。高校生が理解できない、もしくは魅力的に感じない話を延々しても短大の魅力は伝わりません。短大全体の一番の課題かもしれません。
- ・ 新しい高等教育機関や専門学校への対抗策を考えたことがなかったです。専門学校側の立場で高校生へのアピールを考えると「英語など余計な学びがなく、興味のある分野を徹底的に学べる」「教員は学者でなく実際の現場で活躍した先生なので、現場で本当に必要な力がわかっている」「平均的に短大より学費が安い」「入試合格の決まるのが早い」など、思っていたより多く出てきました。一方短大側では、「教員が実務者でなく研究者である」ことのメリットや、「キャンパスライフ」「学位の意味」などの意見が出てきましたが、強力なアピールとはなりにくかったです。ただし、社会的信用という意味では、地域連携やマスコミへの信用も含めて、短大や大学の明らかな強みも発見できました。今後、さらに考えていきます。

課題

- ・ 新しい高等教育機関についての情報は上層部からの報告・連絡のみが平均的な形となっており、現場が咀嚼できていないです。一職員に対しても一方的な説明でなく、対抗策を自ら導き出す機会を設けなければなりません。
- ・ 今回のテーマ「連携」は、地域連携・高大連携・短大間連携はもちろん、自学内連携・課内連携など多岐に及びます。1つだけはないため、そのことを研修会に参加されていない方へお伝えするのが難しいと感じました。
- ・ 入試広報担当者が数年で異動・転職する場合も多く、経験年数の浅い担当者が高校の先生や高校生に対して短大と専門学校の違いを、高校生まで理解できる内容として伝えることは難しく大きな課題です。
- ・ 四大との併設短大の場合、仕事の優先順位が四大メインとなることも多いようです。併設での意識調査等も必要かもしれません。



参加短期大学一覧

81 短期大学 94名 (含・運営委員)

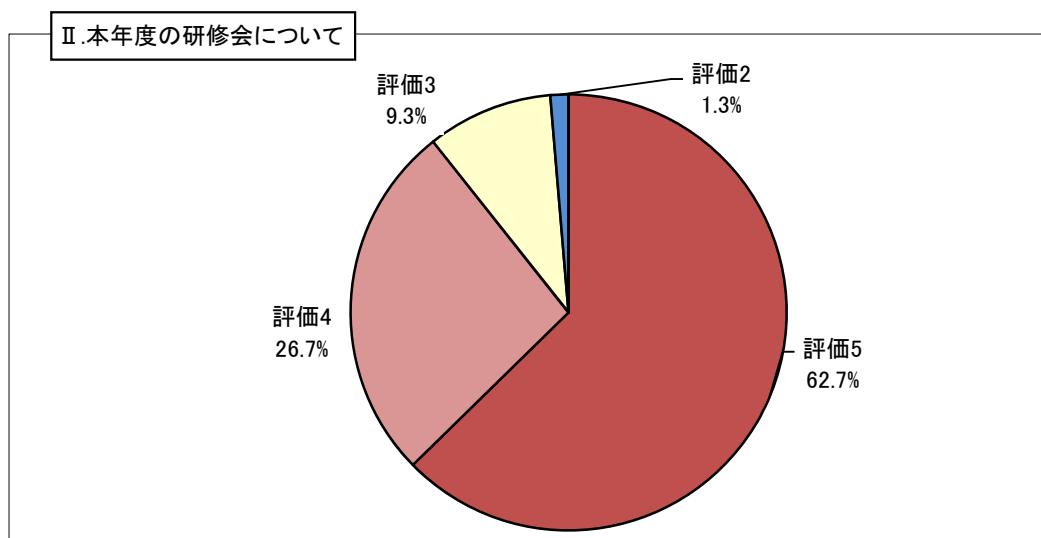
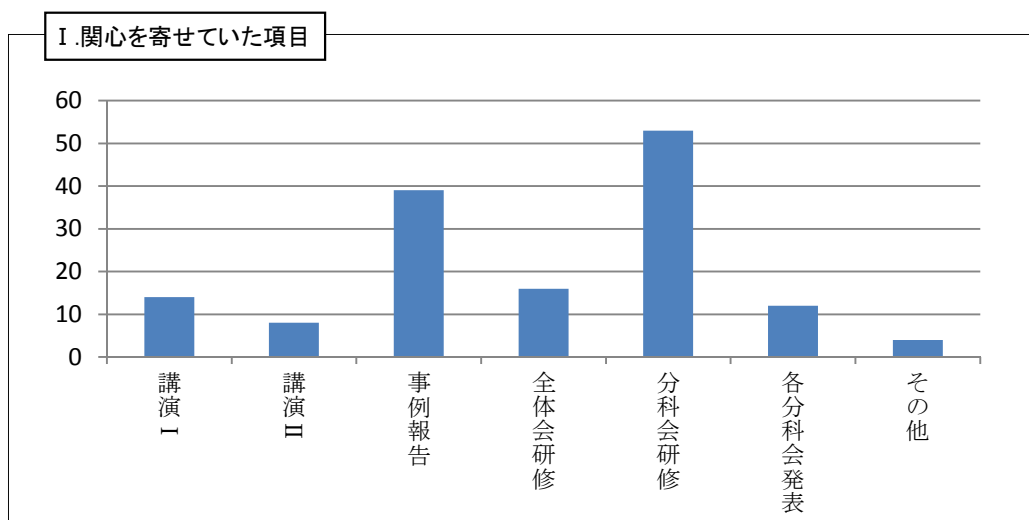
| No. | 都府道 府 県 | 短期大学名 | No. | 都府道 府 県 | 短期大学名 |
|-----|------------|---------------|-----|------------|---------------|
| 1 | 北海道 | 國學院大學北海道短期大学部 | 42 | 富山 | 富山短期大学 |
| 2 | 北海道 | 札幌大谷大学短期大学部 | 43 | 石川 | 金城大学短期大学部 |
| 3 | 北海道 | 札幌国際大学短期大学部 | 44 | 福井 | 仁愛女子短期大学 |
| 4 | 北海道 | 北星学園大学短期大学部 | 45 | 山梨 | 山梨学院短期大学 |
| 5 | 青森 | 青森明の星短期大学 | 46 | 長野 | 飯田女子短期大学 |
| 6 | 青森 | 弘前医療福祉大学短期大学部 | 47 | 長野 | 上田女子短期大学 |
| 7 | 宮城 | 聖和学園短期大学 | 48 | 長野 | 松本短期大学 |
| 8 | 宮城 | 仙台青葉学院短期大学 | 49 | 岐阜 | 大垣女子短期大学 |
| 9 | 秋田 | 日本赤十字秋田短期大学 | 50 | 岐阜 | 岐阜聖徳学園大学短期大学部 |
| 10 | 秋田 | 聖園学園短期大学 | 51 | 静岡 | 静岡英和学院大学短期大学部 |
| 11 | 山形 | 東北文教大学短期大学部 | 52 | 静岡 | 常葉大学短期大学部 |
| 12 | 福島 | いわき短期大学 | 53 | 静岡 | 浜松学院大学短期大学部 |
| 13 | 福島 | 桜の聖母短期大学 | 54 | 愛知 | 愛知学院大学短期大学部 |
| 14 | 栃木 | 宇都宮文星短期大学 | 55 | 愛知 | 愛知工科大学自動車短期大学 |
| 15 | 群馬 | 育英短期大学 | 56 | 愛知 | 岡崎女子短期大学 |
| 16 | 群馬 | 群馬医療福祉大学短期大学部 | 57 | 愛知 | 修文大学短期大学部 |
| 17 | 群馬 | 明和学園短期大学 | 58 | 愛知 | 豊橋創造大学短期大学部 |
| 18 | 埼玉 | 秋草学園短期大学 | 59 | 愛知 | 名古屋短期大学 |
| 19 | 埼玉 | 埼玉医科大学短期大学 | 60 | 愛知 | 名古屋文理大学短期大学部 |
| 20 | 埼玉 | 埼玉女子短期大学 | 61 | 京都 | 華頂短期大学 |
| 21 | 埼玉 | 埼玉東萌短期大学 | 62 | 京都 | 京都外国語短期大学 |
| 22 | 千葉 | 植草学園短期大学 | 63 | 大阪 | 藍野大学短期大学部 |
| 23 | 千葉 | 聖徳大学短期大学部 | 64 | 大阪 | 大阪青山大学短期大学部 |
| 24 | 千葉 | 千葉敬愛短期大学 | 65 | 大阪 | 大阪国際大学短期大学部 |
| 25 | 東京 | 大妻女子大学短期大学部 | 66 | 大阪 | 大阪城南女子短期大学 |
| 26 | 東京 | 共立女子短期大学 | 67 | 大阪 | 四天王寺大学短期大学部 |
| 27 | 東京 | 国際短期大学 | 68 | 兵庫 | 大手前短期大学 |
| 28 | 東京 | 女子栄養大学短期大学部 | 69 | 兵庫 | 豊岡短期大学 |
| 29 | 東京 | 創価女子短期大学 | 70 | 兵庫 | 神戸女子短期大学 |
| 30 | 東京 | 帝京短期大学 | 71 | 兵庫 | 神戸山手短期大学 |
| 31 | 東京 | 戸板女子短期大学 | 72 | 兵庫 | 産業技術短期大学 |
| 32 | 東京 | 東京女子体育短期大学 | 73 | 鳥取 | 鳥取短期大学 |
| 33 | 東京 | 東京成徳短期大学 | 74 | 岡山 | 岡山短期大学 |
| 34 | 東京 | 東京立正短期大学 | 75 | 広島 | 広島文化学園短期大学 |
| 35 | 東京 | 桐朋学園芸術短期大学 | 76 | 山口 | 山口短期大学 |
| 36 | 東京 | 文化学園大学短期大学部 | 77 | 徳島 | 徳島工業短期大学 |
| 37 | 東京 | 目白大学短期大学部 | 78 | 福岡 | 九州大谷短期大学 |
| 38 | 東京 | 山野美容芸術短期大学 | 79 | 福岡 | 九州女子短期大学 |
| 39 | 神奈川 | 小田原短期大学 | 80 | 大分 | 別府大学短期大学部 |
| 40 | 神奈川 | 鎌倉女子大学短期大学部 | 81 | 大分 | 別府溝部学園短期大学 |
| 41 | 神奈川 | 聖セシリア女子短期大学 | | | |

平成28年度「私立短大入試広報担当者研修会」アンケート集計結果

参加者数 94 名
 回答者数 83 名
 回答率 88.3 %

| I. 関心を寄せていた項目 | 講演 I | 講演 II | 事例報告 | 全体会研修 | 分科会研修 | 各分科会発表 | その他 |
|---------------|------|-------|------|-------|-------|--------|-----|
| | 14 | 8 | 39 | 16 | 53 | 12 | 4 |

| | とてもよかった 評価5 | よかった 評価4 | まあまあ 評価3 | あまりよくなかった 評価2 | よくなかった 評価1 | 回答数 |
|--------------|----------------|-------------|-------------|------------------|---------------|-----|
| | II. 本年度の研修会の評価 | 47 | 20 | 7 | 1 | |
| III. 講演 I | 33 | 33 | 14 | 2 | 0 | 82 |
| IV. 講演 II | 15 | 32 | 24 | 7 | 4 | 82 |
| V. 事例報告 | 55 | 24 | 4 | 0 | 0 | 83 |
| VI. 全体会研修 | 46 | 28 | 5 | 2 | 0 | 81 |
| VII. 分科会研修 | 63 | 14 | 2 | 1 | 1 | 81 |
| VIII. 各分科会発表 | 47 | 16 | 8 | 1 | 0 | 72 |



運営委員

| | | | |
|------|-------|-------------|-----------------------|
| 委員長 | 原田博史 | 岡山短期大学 | 理事長・学長 |
| 副委員長 | 麻生隆史 | 山口短期大学 | 理事長・学長 |
| 委員 | 桂健太郎 | 育英短期大学 | 入試広報課長 |
| 〃 | 秋草誠 | 秋草学園短期大学 | 理事・入試広報室長 |
| 〃 | 小比賀誠 | 富山短期大学 | 入試広報課長 |
| 〃 | 後久真嗣 | 仁愛女子短期大学 | 学生部入試広報課長補佐 |
| 〃 | 六浦政人 | 修文大学短期大学部 | 広報課長 |
| 〃 | 平松靖一郎 | 豊橋創造大学短期大学部 | 渉外部次長・企画室長・入試広報センター室長 |
| 〃 | 山田純 | 大阪城南女子短期大学 | 広報室課長 |
| 〃 | 島崎千江子 | 大手前短期大学 | ライフデザイン総合学科 学科長・教授 |
| 〃 | 松元健治 | 広島文化学園短期大学 | 副学長 |

(順不同・敬称略)

平成28年7月1日現在

